

「急性心筋梗塞の話し」

士別市立病院副院長 長島 仁

急性心筋梗塞は、心臓に栄養と酸素を補給している冠動脈が急に詰まり、血流がその先に流れないことから、心臓の一部の筋肉が死んでしまう(壊死)病気で、急死することもあります。症状としては 30 分以上続く胸痛です。今まで感じたことがないような激的な症状の場合が多いようです。「胸をかきむしられるような痛み」、「胸骨の焼けるような熱い痛み」、「胸の上に重い物を乗せられているような感じ」等多彩な症状とともに冷汗を伴い、死の恐怖を感じることもあります。同じ胸痛でも狭心症の場合は 5～15 分くらいで、胸痛の持続時間が急性心筋梗塞の重要な目安になります。

日本で年間約 15 万人が発症し、30%の人が亡くなるといわれています。入院中の死亡率は低下していますが、病院に到着する前に亡くなる方が多いのが課題です。WHO の調査では、急性心筋梗塞による死亡例は 80%が 24 時間以内で、その 3 分の 2 は病院到着前です。ちなみに専門施設のある病院到着後の死亡率は 5～10%です。

心臓の筋肉には再生能力がないため、急性心筋梗塞の第一の治療は、詰まった冠動脈を再び開通させて(再灌流療法)壊死を最小限にとどめることにあります。再開通は早ければ早いほどよく、急性心筋梗塞の治療のゴールデンタイム(心臓のダメージを少なくすることができる時間)は、6 時間といわれています。それを過ぎても 12 時間以内であれば、再開通することで効果があります。

急性心筋梗塞の疑いがあるときは、一刻も早く医療機関に受診する必要があります。